

中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第八回 倭寇と遣明使

襄陽城の戦い

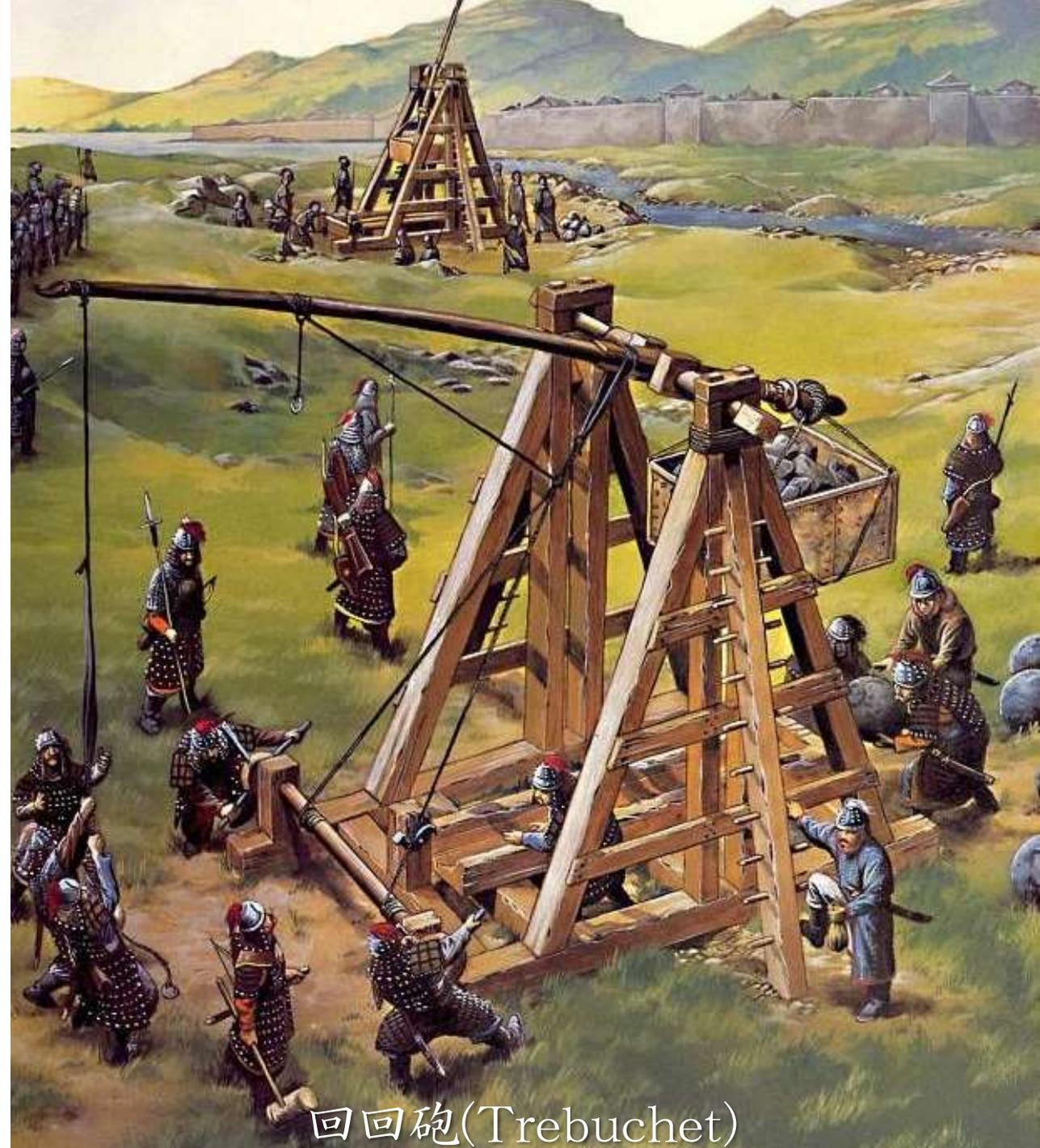
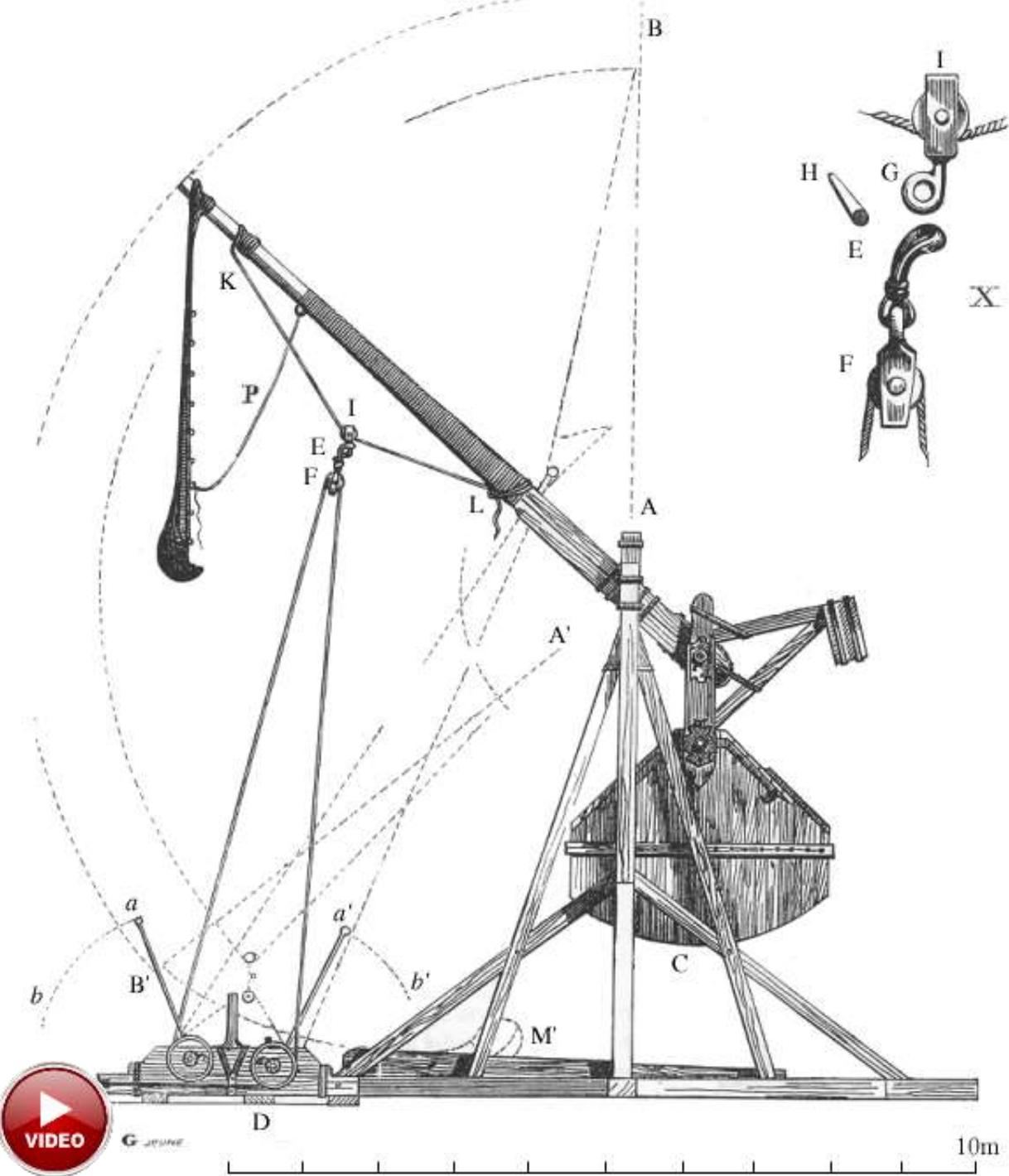
〔解説〕

日本への第一回遠征の後、クビライは南宋への攻撃を本格化し、その防衛拠点の一つ襄陽城を攻撃する。クビライは難攻不落の襄陽城を攻略するため、六千キロも離れたイラクから技術者を招き、最新兵器の開発に当たらせた。





NHK 「文明の道～クビライの夢・ユーラシア帝国の完成」 より



回回砲(Trebuchet)

مخبر حسرتی

مندوز

NHK 「文明の道〜クビライの夢・ユーラシア帝国の完成」 より

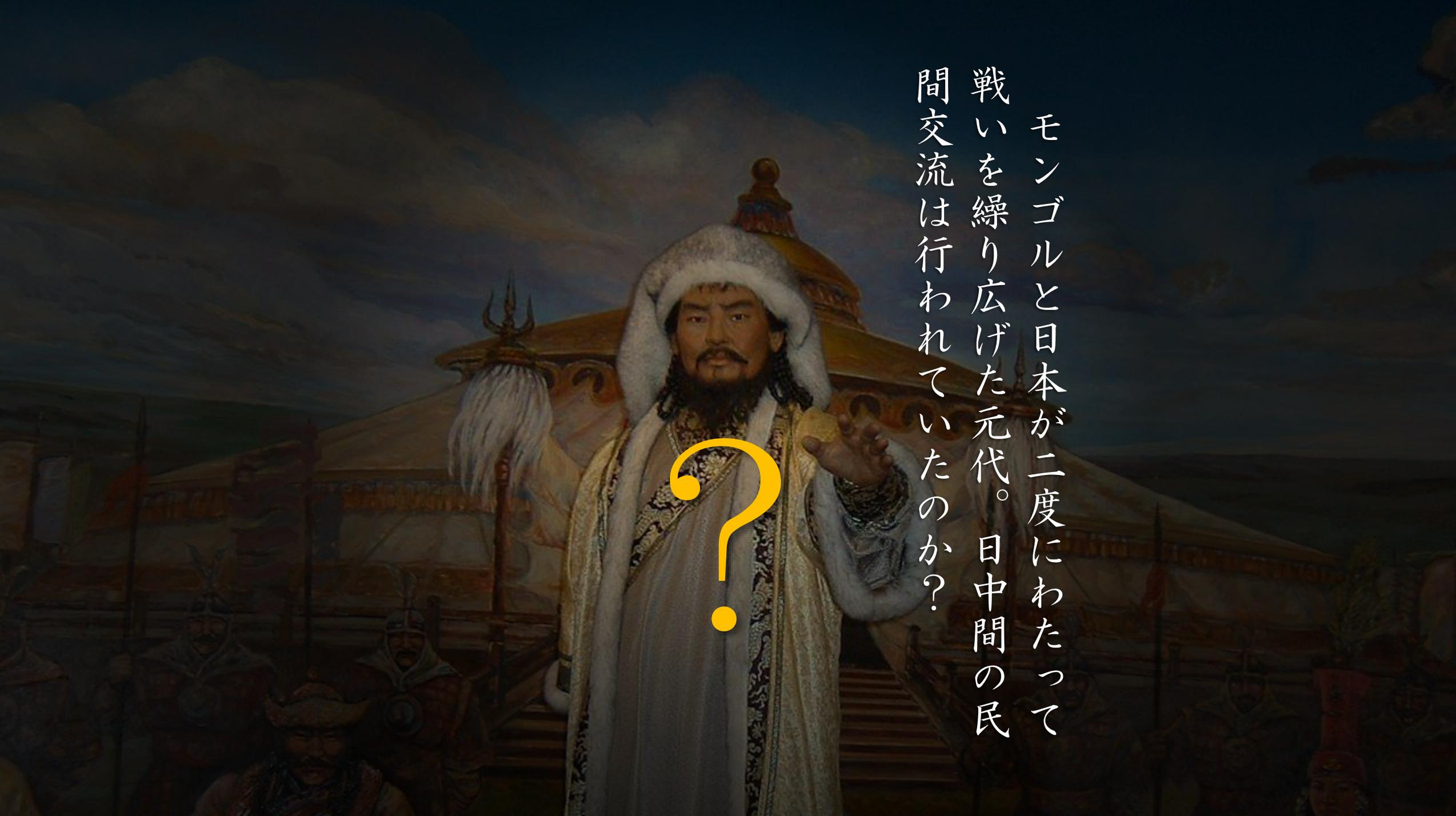
| | | | |
|------|----------------|--------------|-----------|
| 0 | 後漢 25-220 | | |
| 100 | | | |
| 200 | 魏 220-265 | 蜀 221-263 | 呉 222-280 |
| 300 | 晋 265-316 | | |
| 400 | 五胡十六国時代 | 東晋 317-420 | |
| 500 | 北朝 439-589 | 南朝 420-589 | |
| 600 | 隋 581-619 | | |
| 700 | 唐 618-907 | | |
| 800 | | | |
| 900 | 五代十国 907-960 | | |
| 1000 | 遼 | 北宋 960-1127 | |
| 1100 | | | |
| 1200 | 金 1115-1234 | 南宋 1127-1279 | |
| 1300 | 元 1271-1368 | | |
| 1400 | | | |
| 1500 | 明 1368-1644 | | |
| 1600 | | | |
| 1700 | | | |
| 1800 | 清 1616-1912 | | |
| 1900 | 中華民國 1912-1949 | | |
| 2000 | 中華人民共和國 1949- | | |



まとめ

アジアからヨーロッパに至る巨大帝国を築いたモンゴル。中国から漢民族王朝が消え去る中、日本はモンゴル軍の二度にわたる遠征を退ける。

しかし、日本を勝利に導いたのは鎌倉武士の奮闘や暴風雨による天祐だけではなかった。その背景には朝鮮半島やベトナムの人々のモンゴルに対する果敢な抵抗運動があったのである。



モンゴルと日本が二度にわたって
戦いを繰り広げた元代。日中間の民
間交流は行われていたのか？

韓国で発見された日元貿易船

一九七六年、韓国の新安で元代に沈没した貿易船が発見された。
一三一九年に焼失した京都の禅寺・東福寺の再建のために派遣されたと推定されるこの貿易船からは、大量の銅銭や陶磁器が発見された。

京都東福寺の山門(国宝)





| | | | |
|------|-----------------------------------|-------------|--|
| 0 | 後漢 25-220 | | |
| 100 | 魏 220-265 蜀 221-263 吳 222-280 | | |
| 200 | 晋 265-316 | | |
| 300 | 五胡十六国時代 東晋 317-420 | | |
| 400 | 北朝 439-589 南朝 420-589 | | |
| 500 | 隋 581-619 | | |
| 600 | 唐 618-907 | | |
| 700 | 五代十国 907-960 | | |
| 800 | 遼 | 北宋 960-1127 | |
| 900 | 金 1115-1234 南宋 1127-1279 | | |
| 1000 | 元 1271-1368 | | |
| 1100 | 明 1368-1644 | | |
| 1200 | 清 1616-1912 | | |
| 1300 | 中華民國 1912-1949 | | |
| 1400 | 中華人民共和國 1949- | | |



「渡来僧の時代」 民間交流の最盛期

元朝の時代、日本と中国大陸との外交関係は二度の元寇を挟んで緊張が続いていた。しかし、両国間の民間交流は禅宗の僧侶や貿易商人を中心に最盛期を迎えていた。

鎌倉・建長寺の山門

1268年 1月、モンゴルの命を受けた高麗の使節団が大宰府に来訪し親書(蒙古国牒状)を渡す(第一回)

69年 2月、モンゴルの使節団が対馬に来訪(第二回) 9月、再び対馬に来訪し国書を渡す(第三回)

70年 1月、朝廷がモンゴルへの返書を作るが、幕府の反対で送付せず

71年 9月、趙良弼らモンゴルの使節団が筑前に来訪(第四回) 11月、国号を大元と定める

72年 2月、趙良弼ら使節団とともに日本の使節が高麗を経由して元の都・大都を視察

73年 3月、趙良弼らが再び大宰府に来訪(第五回) 4月、朝鮮で三別抄の抵抗運動が鎮圧される

74年 10月、元の軍隊が対馬、筑前に来襲 (文永の役)

75年 4月、杜世忠ら元の使節団が長門室津に来訪 9月、鎌倉で斬首される(第六回)

76年 1月、元が南宋の都・臨安を攻略、宋帝を大都へ 10月、幕府が筑前の海岸に石塁を築造

77年 6月、南宋に渡った日本商船が交易を止めて帰国

78年 11月、元が日本商船の交易を許す

79年 2月、元が南宋を滅ぼす 7月、周福ら元の使節団が筑紫に来訪 博多で斬首される(第七回)

80年 2月、朝廷が諸寺に異国降伏の祈禱を命じる

81年 5月、高麗軍が対馬に来襲 6月、元軍が高麗軍と合流し、志賀島、長門に来襲 (弘安の役)

(中略)

88年 ベトナムがバクダン(白藤)河の戦いで元軍を破る

東アジアの人々の対日イメージは、古代から中世の鎌倉時代に至るまではきわめて良好なものであった。

ところが室町時代以降になると、そのイメージは大きく変化する。暴虐非道といったネガティブなイメージが作られていくのである。

では、なぜこうした変化が起こったのか。今回の講義では、その原因となった倭寇とその背景について考えてみたい。

室町時代、南北朝時代、戦国時代。
その三つの時代の関係は？



| | | | |
|------|----------------|--------------|-----------|
| 0 | 後漢 206BC~220AD | | |
| 100 | | | |
| 200 | 魏 220~265 | 蜀 221~263 | 吳 222~280 |
| 300 | 晉 265-316 | | |
| 400 | 五胡十六国時代 | 東晉 317-420 | |
| 500 | 北朝 439-589 | 南朝 420-589 | |
| 600 | 隋 581-619 | | |
| 700 | 唐 618-907 | | |
| 800 | | | |
| 900 | 五代十国 907-960 | | |
| 1000 | 遼 | 北宋 960-1127 | |
| 1100 | | | |
| 1200 | 金 1115-1234 | 南宋 1127-1279 | |
| 1300 | 元 1271-1368 | | |
| 1400 | 明 1368-1644 | | |
| 1500 | | | |
| 1600 | 清 1616-1912 | | |
| 1700 | | | |
| 1800 | | | |
| 1900 | 中華民國 1912-1949 | | |
| 2000 | 中華人民共和國 1949- | | |



| | | |
|------|------------------|----------------|
| 0 | 彌生時代 紀元前?世紀~3世紀 | |
| 100 | | |
| 200 | | |
| 300 | | |
| 400 | 古墳時代 4世紀末~? | |
| 500 | | |
| 600 | 飛鳥時代 6世紀末~710 | |
| 700 | 奈良時代 710~794 | |
| 800 | | |
| 900 | | |
| 1000 | 平安時代 794~1192 | |
| 1100 | | |
| 1200 | 鎌倉時代 1192~1333 | |
| 1300 | | |
| 1400 | 室町時代 | 南北朝時代 1336-92 |
| 1500 | 1336~1573 | 戰国時代 1467-1573 |
| 1600 | 安土桃山時代 1573~1603 | |
| 1700 | 江戸時代 1603~1868 | |
| 1800 | | |
| 1900 | 近代 1868~1945 | |
| 2000 | 現代 1945~現在 | |

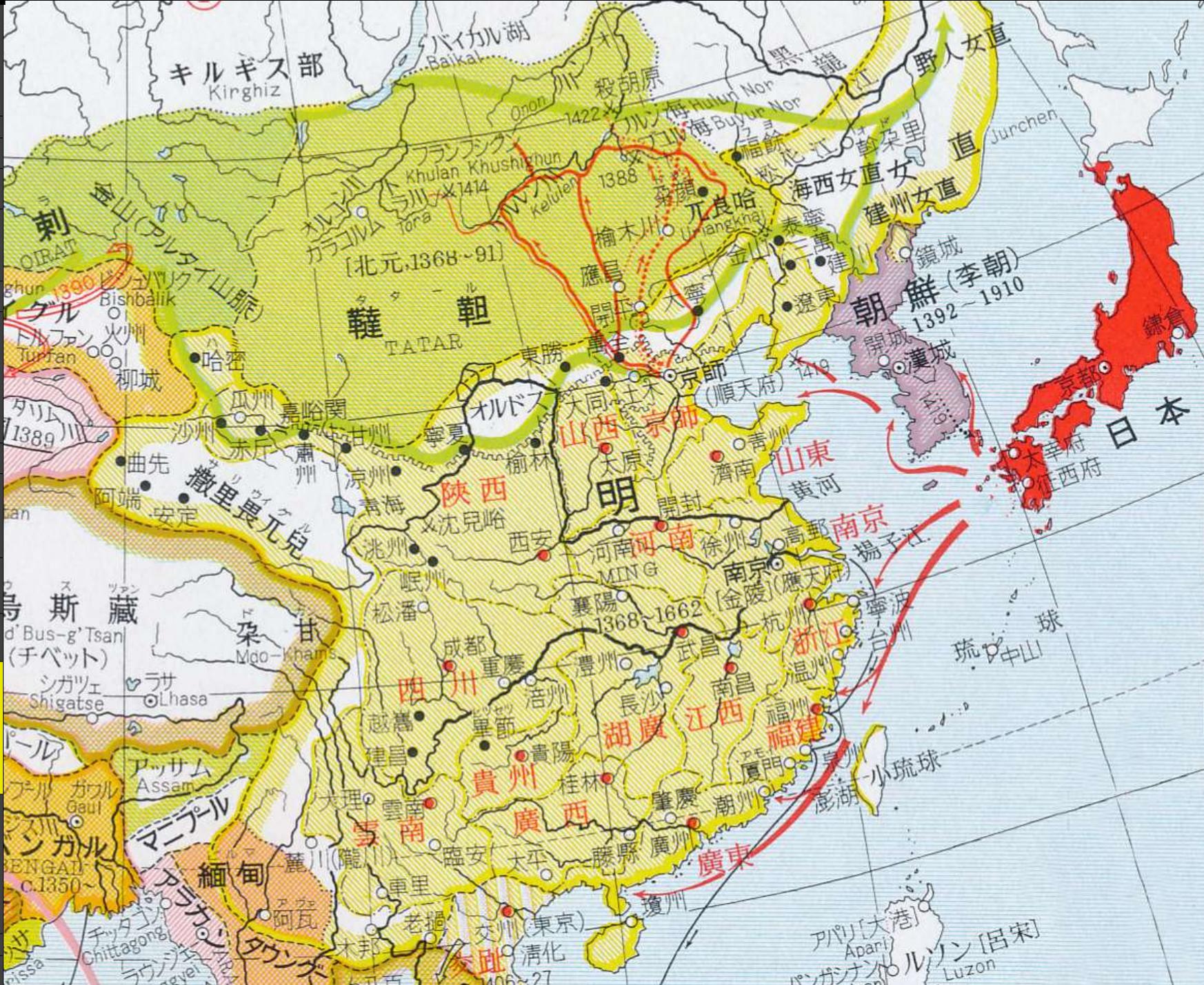
南北朝の争乱に始まった室町時代。朝廷や幕府が海上の武装集団による密貿易や略奪行為を黙認したことで、東アジアの人々の対日イメージは大きく悪化する(前期倭寇)。

一三六八年、モンゴルを駆逐し、漢民族の王朝を復興した明は、国境警備を強化するため民間貿易を禁止し、朝貢貿易への一本化を進める。

一方、六十年におよぶ南北朝の争乱に終止符を打った室町幕府は、倭寇を取り締まり、一四〇四年、遣唐使廃止以来およそ五百年ぶりに使節を派遣し、明との交流と貿易を始めた(遣明使)。

しかし、室町幕府の力が衰え、戦国時代を迎えると、多国籍化した武装集団が再び日本を拠点に大規模な密貿易と略奪行為を再開した(後期倭寇)。

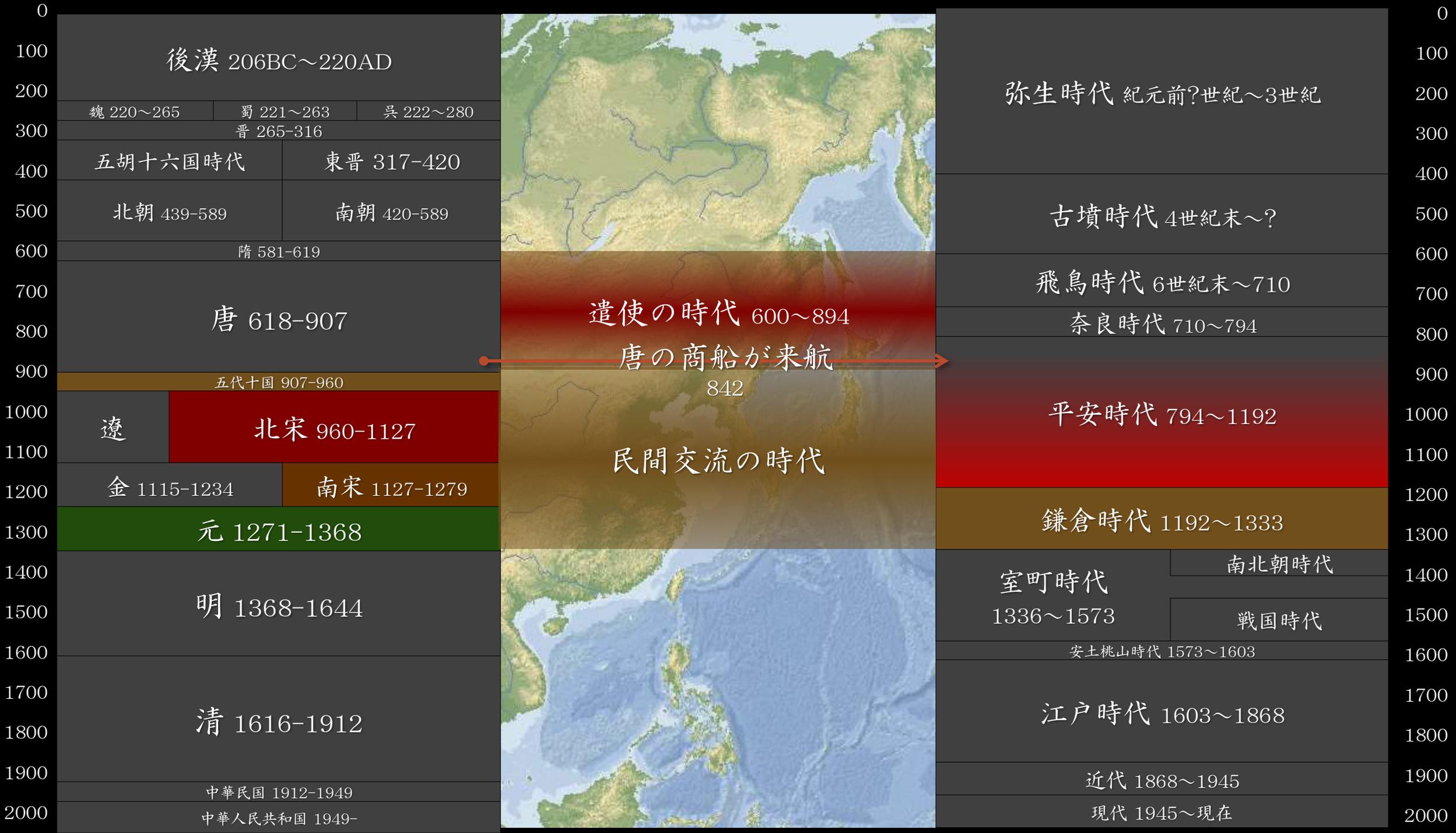
| | | | |
|------|----------------|--------------|-----------|
| 0 | 後漢 25-220 | | |
| 100 | | | |
| 200 | 魏 220-265 | 蜀 221-263 | 吳 222-280 |
| 300 | 晋 265-316 | | |
| 400 | 五胡十六国時代 | 東晋 317-420 | |
| 500 | 北朝 439-589 | 南朝 420-589 | |
| 600 | 隋 581-619 | | |
| 700 | | | |
| 800 | 唐 618-907 | | |
| 900 | 五代十国 907-960 | | |
| 1000 | 遼 | 北宋 960-1127 | |
| 1100 | | | |
| 1200 | 金 1115-1234 | 南宋 1127-1279 | |
| 1300 | 元 1271-1368 | | |
| 1400 | 明 1368-1644 | | |
| 1500 | | | |
| 1600 | | | |
| 1700 | | | |
| 1800 | 清 1616-1912 | | |
| 1900 | 中華民國 1912-1949 | | |
| 2000 | 中華人民共和國 1949- | | |

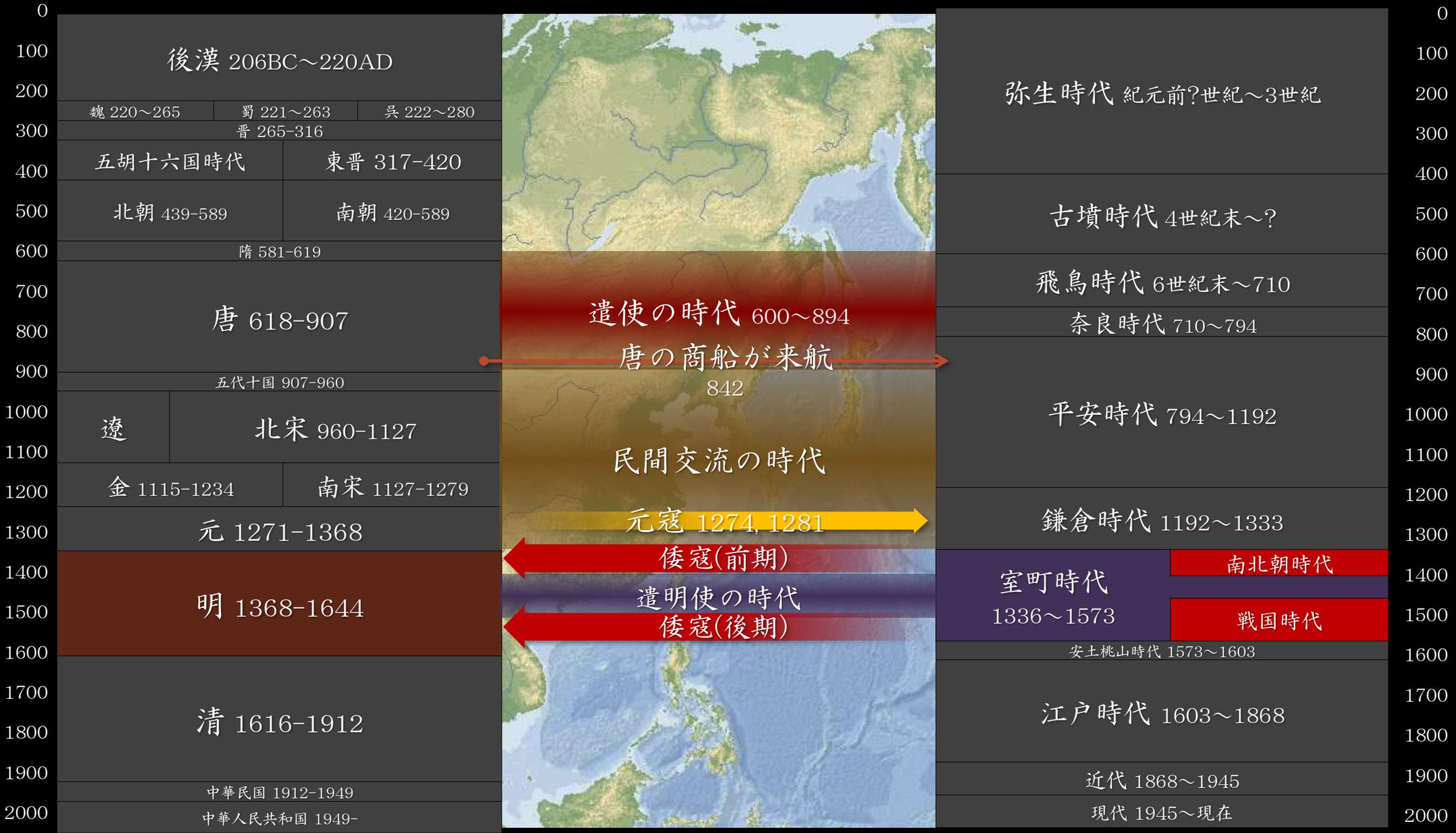


| | | | |
|------|---|--------------|--|
| 0 | 後漢 206BC~220AD | | |
| 100 | | | |
| 200 | 魏 220~265 蜀 221~263 吳 222~280 | | |
| 300 | 晉 265-316 | | |
| 400 | 五胡十六国時代 | 東晋 317-420 | |
| 500 | 北朝 439-589 | 南朝 420-589 | |
| 600 | 隋 581-619 | | |
| 700 | 唐 618-907 | | |
| 800 | | | |
| 900 | 五代十国 907-960 | | |
| 1000 | 遼 | 北宋 960-1127 | |
| 1100 | | | |
| 1200 | 金 1115-1234 | 南宋 1127-1279 | |
| 1300 | 元 1271-1368 | | |
| 1400 | | | |
| 1500 | 明 1368-1644 | | |
| 1600 | | | |
| 1700 | 清 1616-1912 | | |
| 1800 | | | |
| 1900 | 中華民國 1912-1949 | | |
| 2000 | 中華人民共和國 1949- | | |



| | | |
|------|------------------|-------|
| 0 | 弥生時代 紀元前?世紀~3世紀 | |
| 100 | | |
| 200 | | |
| 300 | | |
| 400 | 古墳時代 4世紀末~? | |
| 500 | | |
| 600 | 飛鳥時代 6世紀末~710 | |
| 700 | 奈良時代 710~794 | |
| 800 | | |
| 900 | 平安時代 794~1192 | |
| 1000 | | |
| 1100 | | |
| 1200 | 鎌倉時代 1192~1333 | |
| 1300 | | |
| 1400 | 室町時代 | 南北朝時代 |
| 1500 | 1336~1573 | 戦国時代 |
| 1600 | 安土桃山時代 1573~1603 | |
| 1700 | 江戸時代 1603~1868 | |
| 1800 | | |
| 1900 | 近代 1868~1945 | |
| 2000 | 現代 1945~現在 | |





遣使の時代 600~894

唐の商船が来航 842

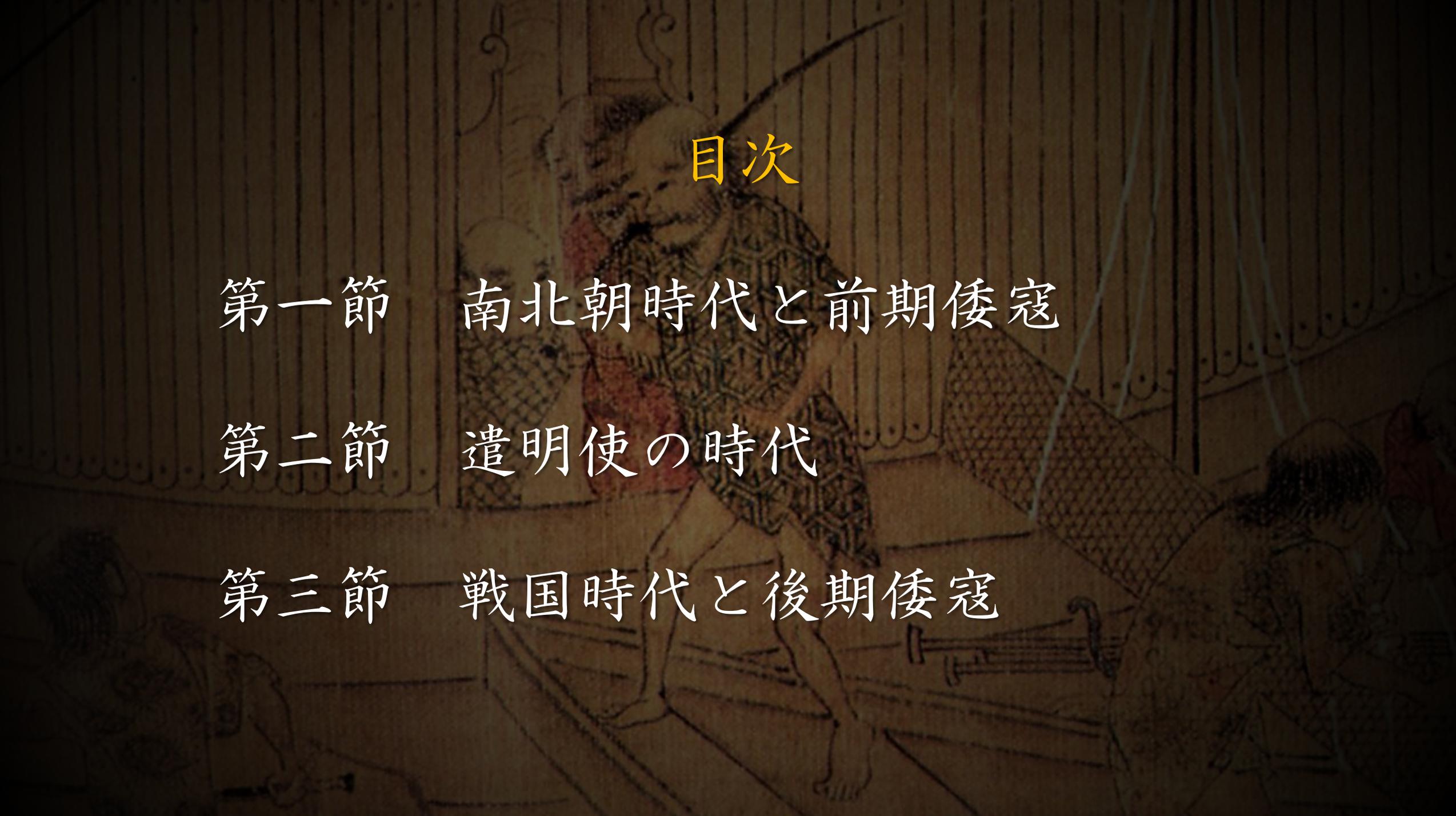
民間交流の時代

元寇 1274, 1281

倭寇(前期)

遣明使の時代

倭寇(後期)



目次

第一節 南北朝時代と前期倭寇

第二節 遣明使の時代

第三節 戦国時代と後期倭寇



第一節 南北朝時代と前期倭寇



中国皇帝風に冕冠十二旒をかぶり、
僧衣を身につけたこの人物は誰で
しょうか？

① 後醍醐天皇

② 足利尊氏



後醍醐天皇と建武の新政

〔解説〕

一三三三年、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇は、中国の皇帝専制に倣って天皇による親政をめざした。

しかし、皇帝専制を支える科挙制度による文官優位の体制が築かれていなかったため、足利尊氏ら武家勢力の離反を招き、その後日本はおよそ六十年間にわたる南北朝の分裂時代を迎える。

*図版は重要文化財「絹本着色後醍醐天皇御像」

(神奈川県藤沢市遊行寺(ゆぎょうじ)蔵)



「異形の王権」 後醍醐天皇

〔解説〕

衣装には黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）とよばれる天皇だけが着用でききるする袍をまとい、頭上には太陽が輝いている。

頭には中国の皇帝を真似て冕冠十二旒という冠をかぶっている。

袍の上には仏教の袈裟を纏い、右手には五鈷杵（ごこしよ）、左手には金剛鈴という法具を持ち、仏が坐す蓮華の敷物の上に坐っている。

*図版は重要文化財 「絹本着色後醍醐天皇御像」

（神奈川県藤沢市遊行寺（ゆぎようじ）蔵）

中国大陸

朝鮮半島

日本列島

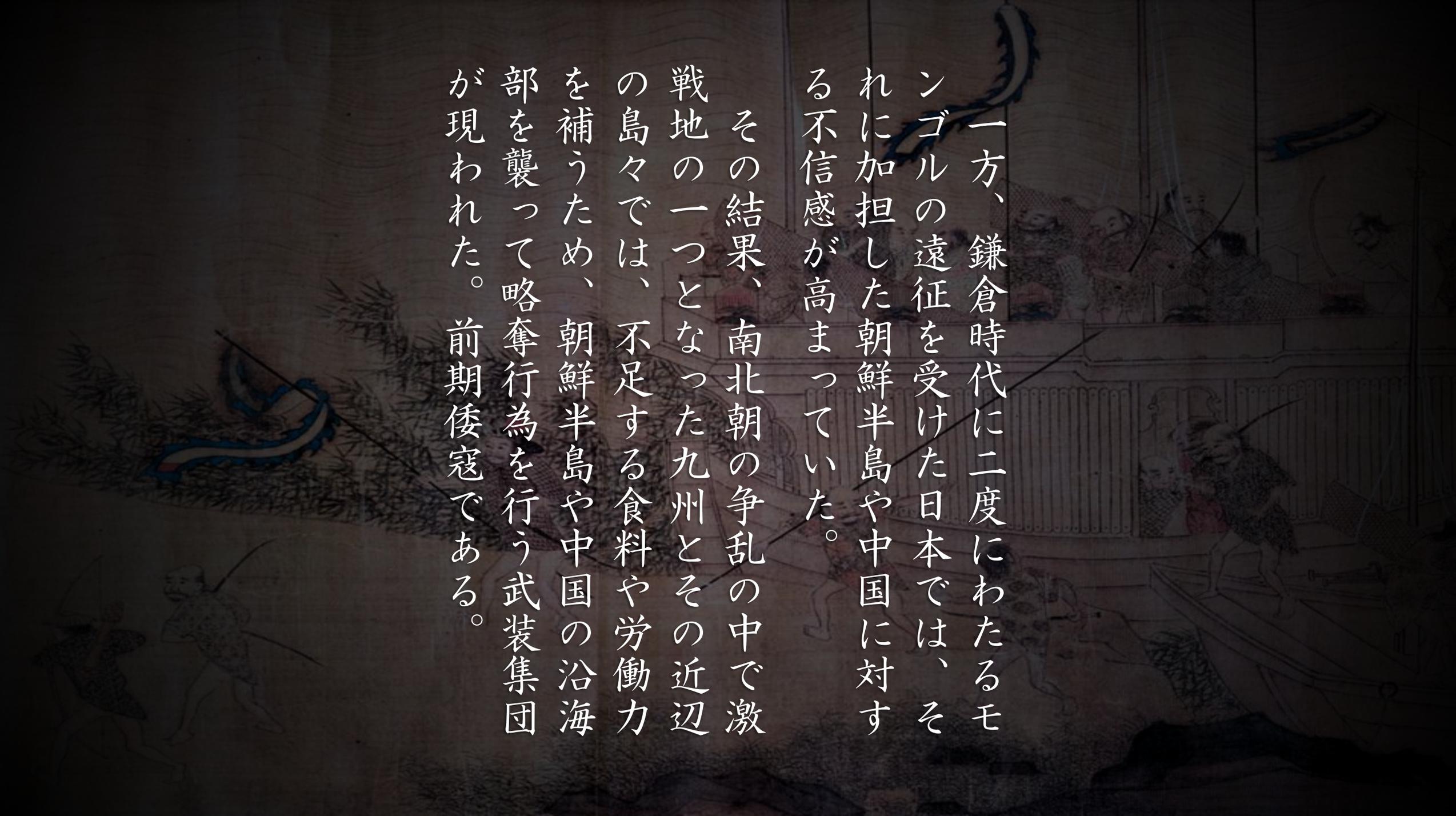
東アジアの科挙制度と文官統制

後漢
25-220

弥生時代



建武の新政



一方、鎌倉時代に二度にわたるモンゴルの遠征を受けた日本では、それに加担した朝鮮半島や中国に対する不信感が高まっていた。

その結果、南北朝の争乱の中で激戦地の一つとなった九州とその近辺の島々では、不足する食料や労働力を補うため、朝鮮半島や中国の沿海部を襲って略奪行為を行う武装集団が現われた。前期倭寇である。





明太祖洪武帝(1328~98)

明の建国

〔解説〕

日本が南北朝の争乱に明け暮れていたころ、中国では貧農の家に生まれた朱元璋が元末の反乱の中で頭角を現し、一三六八年、モンゴルを駆逐して漢民族の王朝を復興した。明である。

朱元璋は建国後ただちに日本へ使節を派遣し、元末以来、しばしば中国沿岸部を襲っていた倭寇の取締りを求めた。



明太祖洪武帝(1328~98)



朱元璋が派遣した使節を迎えたのは足利将軍義満を後ろ盾とする北朝側か、それとも南朝側か？

①北朝側

②南朝側

南北朝皇統譜

(北朝)

後伏見天皇

光嚴天皇

崇光天皇

花園天皇

光明天皇

後光嚴天皇

(南朝)

後醍醐天皇

尊良親王

世良親王

成良親王

後村上天皇

長慶天皇

護良親王

宗良親王

懷良親王

後醍醐天皇の皇子であり、南朝の
征西大將軍でもあった懐良親王は、
なぜ倭寇による拉致や略奪を黙認し
ていたのか？

① 漢民族王朝である明の復興に脅
威を感じていたから

② 元寇を行ったモンゴルやそれに
加担した高麗に敵意を抱いてい
たから



日本は、モンゴルの二度にわたる遠征（元寇）を受けたことで、強い警戒心と敵意を持っていた。

さらに一三三六年からおよそ六十年続いた南北朝の争乱によって食料や労働力が不足すると、海上の武装集団（倭寇）が日本を拠点として朝鮮半島や中国沿海部で拉致や略奪を行うのを黙認していた。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我

明からの倭寇取締り要求

其僧祖來奉表稱臣

洪武二年（一三六九年）三月、洪武帝は使節として楊載を派遣して、日本に詔諭を下し、倭寇の侵入について責任を追及した。

「朝貢を望むなら宮廷に来るようにならねばならぬ。武器を調え守りを固めよ。もし倭寇を続けるのなら、將軍に命じて征伐するのみ。王よ、よく考えよ」

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣

明からの倭寇取締り要求

日本の王良懷(懷良)は命に従わず*、再び倭寇が山東を襲い、さらに温州、台州、明州(寧波)の沿海住民を略奪し、ついには福建の沿海郡に及んだ。

明史卷三百二十二日本伝

*このとき懷良親王は、明が派遣した使節七人のうち五人を殺害し、楊載ら二名は、三ヶ月に及ぶ拘留の後釈放された。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣

明からの倭寇取締り要求

そこで洪武三年（一三七〇年）三月、萊州府の同知趙秩を派遣して、日本の責任を追及した。

海を渡り日本の領内に入ったが、警備の者に入国を阻まれたため、懐良親王に書簡を送ると、親王は趙秩を迎え入れた。

具前史惟元世祖數遣使趙良弼招之不至乃命忻都范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝即位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我

明からの倭寇取締り要求

其僧祖來奉表稱臣

懷良親王は言った。

「わが国は扶桑の東にあるが、いつも中国を敬慕してきた。ところが蒙古は我々と同じ夷狄でありながら、我々を臣従させようとし、先王がこれを不服とすると趙という姓の者を派遣し、甘言をもつて欺こうとした。そして交渉も終わらぬ中に、十万の水軍が海岸に並んだ。」

日本遠征に反対した元朝の政治家

〔解説〕

懐良親王が言う趙という姓の者とは趙良弼（一二一七―一八六）を指す。

趙良弼は女真族の出身。金朝の時代、モンゴルとの戦いで父や兄を失い、母とともに戦火の中をさまよった。金朝滅亡後、即位前のクビライに起用され、中国各地の安撫に当たる。

一二七〇年、日本との外交交渉に当たることを願い出て、一二七一年、大宰府を訪問。四カ月ほど滞在した後、大宰府の使節とともに帰国。

一二七二年、日本を再度訪問。一年ほど滞在した後、帰国してクビライに日本遠征をやめるよう進言した。

明からの倭寇取締り要求

「いま新たな天子が中国で帝位についたというが、使節の姓は趙であるからこれも蒙古の後裔であり、甘言によってわれらを欺き襲撃するつもりであろう」

そして左右の者に趙秩を斬るよう目くばせした。

明史卷三百二十二日本伝

范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝卽位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以

明からの倭寇取締り要求

趙秩は少しも動じることなく、
ゆっくりとこう言った。

「わが大明国の天子は、神聖にして
文武を兼ねること蒙古の比ではない。
また私も蒙古の使者の後裔ではない。
殺せるなら、殺すがよい」

明史卷三百二十二日本伝

范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遭暴風軍盡沒
後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝卽位方國
珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東
濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且
詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲
寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復
寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年
三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入
其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶
桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我
先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍
十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新
天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好
語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天
子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我
良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣
貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四
年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以

明からの倭寇取締り要求

懐良親王は驚いて堂を下ると、秩を手厚くもてなし、その国の僧・祖来を派遣して上表文を奉じて臣下と称し、馬や特産物を貢物として献上した。また明州(寧波)と台州の二郡から拉致した七十余名を、洪武四年(一三七一年)十月に都へ帰還させた。

明史卷三百二十二日本伝

范文虎等帥舟師十萬征之至五龍山遇暴風軍盡沒後屢招不至終元世未相通也明興高皇帝卽位方國珍張士誠相繼誅服諸豪亡命往往糾島人入寇山東濱海州縣洪武二年三月帝遣行人楊載詔諭其國且詰以入寇之故謂宜朝則來廷不則修兵自固倘必爲寇盜卽命將徂征耳王其圖之日本王良懷不奉命復寇山東轉掠溫台明州旁海民遂寇福建沿海郡三年三月又遣萊州府同知趙秩責讓之泛海至析木崖入其境守關者拒弗納秩以書抵良懷良懷延秩入諭以

中國威德而詔書有責其不臣語良懷曰吾國雖處扶桑東未嘗不慕中國惟蒙古與我等夷乃欲臣妾我我先王不服乃使其臣趙姓者誅我以好語語未旣水軍十萬列海岸矣以天之靈雷霆波濤一時軍盡覆今新天子帝中夏天使亦趙姓豈蒙古裔耶亦將誅我以好語而襲我也目左右將兵之秩不爲動徐曰我大明天子神聖文武非蒙古比我亦非蒙古使者後能兵兵我良懷氣沮下堂延秩禮遇甚優遣其僧祖來奉表稱臣貢馬及方物且送還明台二郡被掠人口七十餘以四年十月至京太祖嘉之宴賚其使者念其俗佞佛可以



第二節 遣明使の時代

南北朝の合体と遣明使の派遣

〔解説〕

一三九二年、南北朝の合体によって、六十年近く続いた分裂の時代に終止符が打たれた。

室町幕府の第三代将軍・足利義満は、一四〇一年、明に使節を派遣し、建文帝から日本国王の冊封を受ける。室町幕府の取締り強化によって前期倭寇は沈静化し、東アジアは百年以上に及ぶ平和な時代を迎える。

足利義満(1358~1408)

倭寇は日本人ではないのか？

私が聞くところによれば、前朝(高麗)の末、倭寇が横行し、民は安心して暮らすことができませんでした。

しかしその中の倭人はわずかに一、二に過ぎず、わが国の民が倭服で変装して乱を為していたといえます。

李順蒙上書 (朝鮮王朝實錄世宗二八年)

*朝鮮王朝初期の武官・李順蒙が一四四二年、流民対策のため号牌制度★を復活を求めた上書。高麗

末、流民たちが倭人に変装し活動していたとするこの一節は、流民対策の必要性を強調するため

引かれた伝聞に過ぎないと考える研究者もいる。虞其人物數小江原黃海道則已矣本道及慶尚忠清道連境流移人物內三十年以前自其祖父母時移來付藉久遠居生人乞除還本仍舊居住以便官民下兵曹與議政府同議○壬戌判中樞院事李順蒙上書曰臣伏觀國家聲教遠被邊境無虞生齒之繁戶口之夥而軍額不

加者以其民無定志而逃避差役者多也其中公私隘口逃移他道自冒兩班婚姻有蔭之家至有生子之後見獲還賤者其為反常甚多臣聞前朝之季倭寇興行民不聊生然其間倭人不過一二而本國之民假著倭服成黨作亂是亦鑑也今新白丁與平民間居相與作黨為盜宰殺牛馬之利耳濡目染以為常事或因罅隙故燒人家將恐有難防之患救弊之要莫切於號牌昔在太宗朝號牌之法試行數年而流移鮮少或議煩擾民間而廢之此弊小矣當時盜賊流亡之徒日盛不紀臣願復行號牌之法禁遊手之輩弭盜賊之源則良賤自別而

日數獄訟弭而民之生

任盛祚

壬申生

癸亥嘉善

乙丑... 安道採... 亘古無減捕捉多少在人... 心所致也予甚不取今年儻或未獲則進獻將廢如之何其大抵入臣... 事君以誠敬為主若有受命之事竭力盡心期於必成如或不然是欺... 君父也爾體予意更加考察以捕又諭于監司都節制使○遣上護軍

倭寇の地域別発生件数

■ 朝鮮半島 ■ 中国

田中健夫『倭寇 海の歴史』
(講談社学術文庫 2012年)をもとに作成

遣明船の派遣 1401-1547



鎌倉時代

南北朝時代
1336-92年

室町時代

戦国時代
1493-1573年

安土桃山時代

江戸時代



②十九回

①九回

遣明船は一四〇一年から一五四七年の約一五〇年の間に、計何回派遣されたか？



足利義満(1358~1408)





この人物は一四六七年、遣明船に同乗して明に渡り、絵画を学んで帰国し、室町時代の水墨画を大成した画僧である。この人物は誰か？

①雪舟

②一休



雪舟(一四二〇～一五〇六年頃)

〔解説〕

雪舟は室町時代に日本の水墨画を大成した画僧。

少年時代、京都の相国寺に入り、僧侶となる。

一四六七年(応仁元年)、四十七歳の時、遣明船に同乗して明に渡る。

天童山景德寺で禅班第一座に任ぜられた後、北京に上って歴代の名画を模写するとともに、宮廷画家の李在らに中国絵画の技法を学んだ。



雪舟(1420～1506頃)



NHK ETV特集「中国でよみがえる雪舟」より



(明)李在「山水図」

この二幅の絵は、一方が雪舟の描いたもの、もう一方が雪舟に中国絵画の技法を伝えた明の宮廷画家・李在が描いたものである。どちらが雪舟の描いたものか？



(日本)雪舟「四季山水図」



この絵は、雪舟がいつ、どこで描いたものか？

①留学中に中国で

②帰国後に日本で



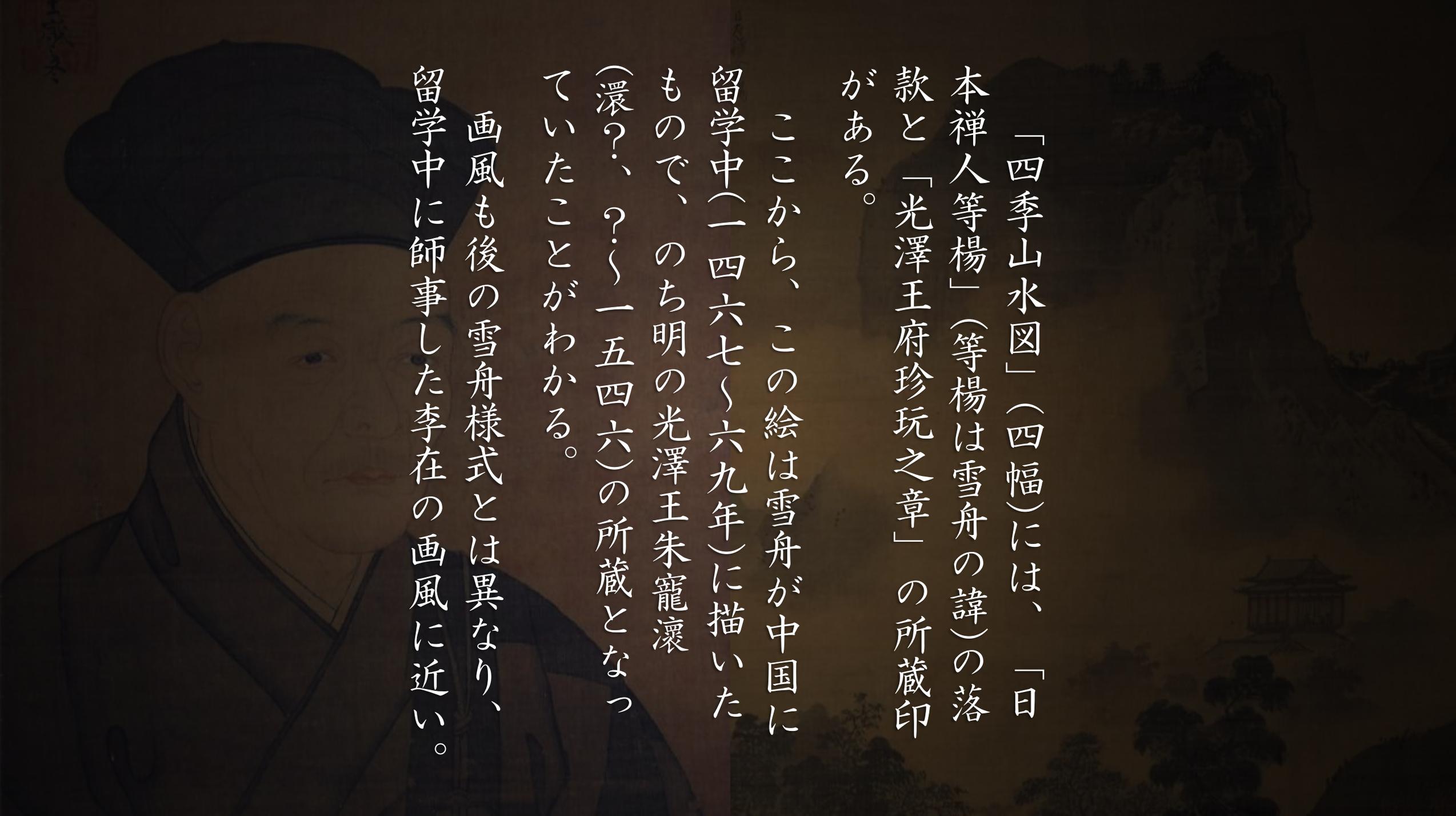


雪舟(1420~1506頃)

日者之禪(雪舟)



雪舟「四季山水図」



「四季山水図」（四幅）には、「日本禅人等楊」（等楊は雪舟の諱）の落款と「光澤王府珍玩之章」の所蔵印がある。

ここから、この絵は雪舟が中国に留学中（一四六七〜六九年）に描いたもので、のち明の光澤王朱寵瀆（濃？、？〜一五四六）の所蔵となっていたことがわかる。

画風も後の雪舟様式とは異なり、留学中に師事した李在の画風に近い。

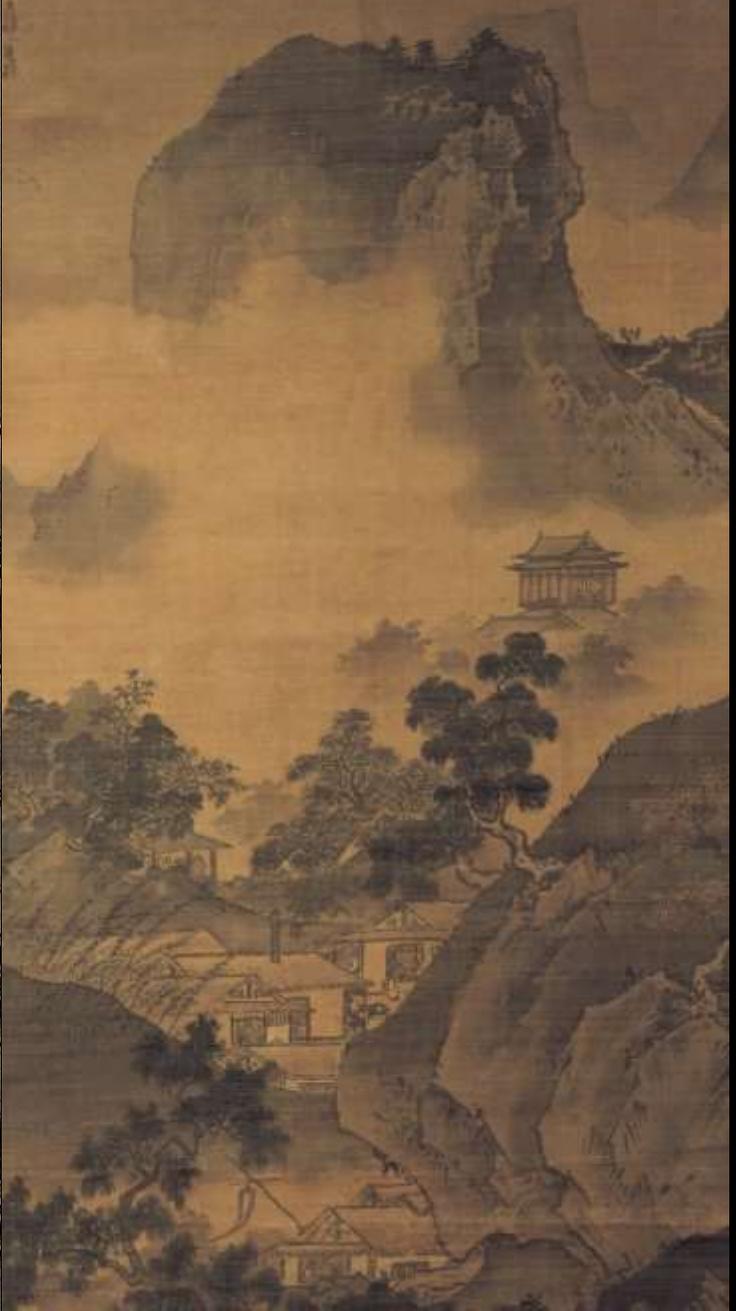
雪舟の師・李在が描いた「山水図」



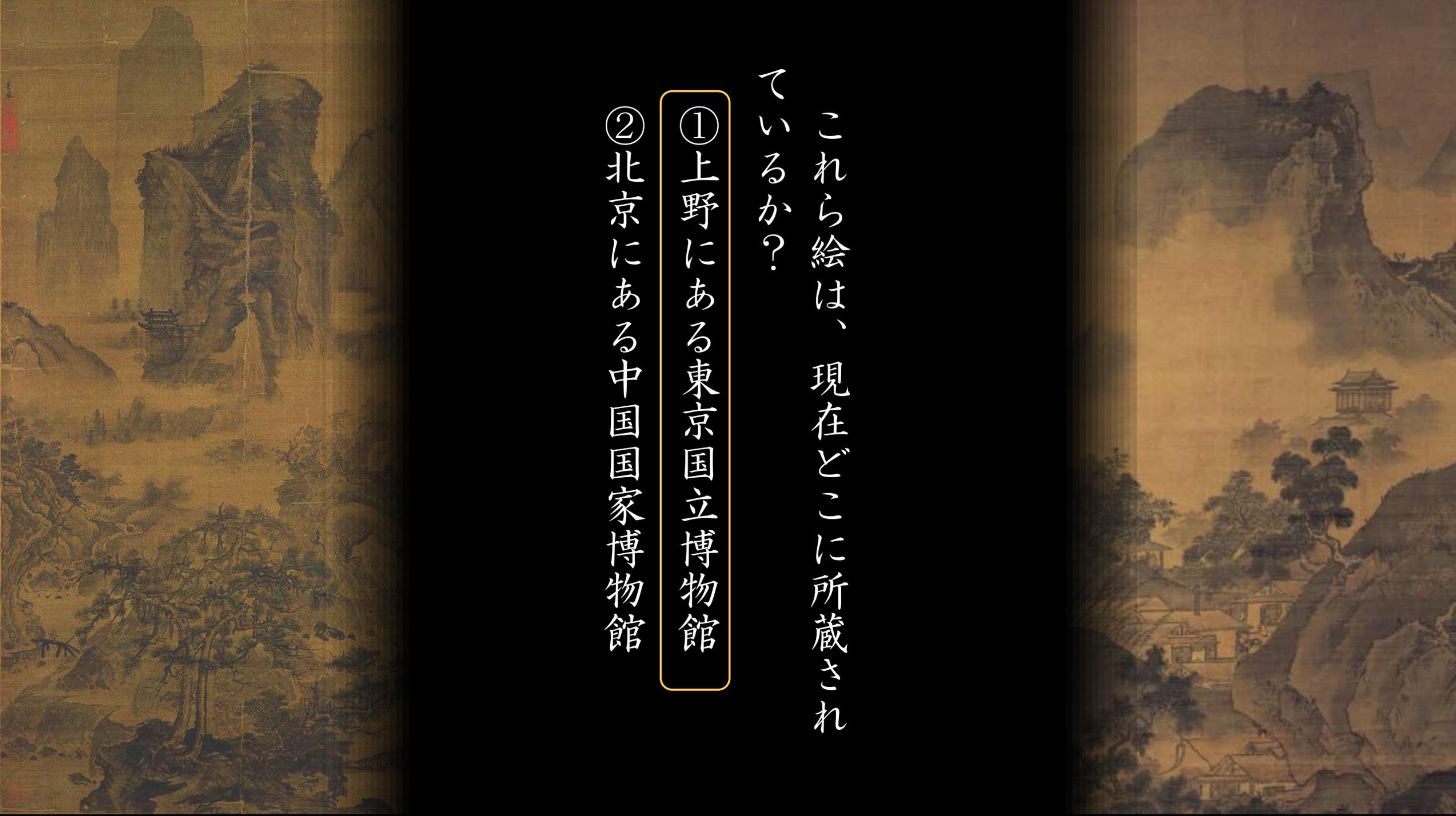
雪舟が留学中に描いた「四季山水図」



雪舟が留学中に描いた「四季山水図」



雪舟が帰国後に描いた国宝「秋冬山水図」



これら絵は、現在どこに所蔵されているか？

① 上野にある東京国立博物館

② 北京にある中国国家博物館



東京国立博物館

The background is a traditional Chinese ink wash painting. It depicts a landscape with a prominent mountain peak in the center, surrounded by smaller hills and trees. In the foreground, a group of about ten people, including men and women in traditional attire, are gathered together. The overall tone is dark and atmospheric, with the text overlaid in a bright, clean font.

第三節 戦国時代と後期倭寇

後期倭寇

一四六七年の応仁の乱以降、室町幕府の権威は失墜し、日本はふたたび戦乱の時代を迎える。戦国時代である。

遣明船の派遣はその後も続いていったが、日明間の密貿易の拡大により、一五四七年の第十九回を最後に終焉を迎えた。

一五四八年、明は密貿易の拠点であった双嶼を討伐するが、日本に逃れた密貿易商人・王直らは、五島列島に本拠を移し、新たに多国籍の「倭寇」が猛威を振るうようになる。



王直ら拠点を五島列島に移す

朱紘が密貿易の拠点双嶼(六横島)を討伐(1548年)

密貿易商人・王直は、一五四三年にもその後の日本の歴史に大きな影響を与えるある事件に関わっている。その事件とは？

① キリスト教の伝来

② 種子島への鉄砲伝来



隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生々無窮是故名焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船容百餘人其形不類其

神皇正統記

話不通見者以為奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶遇五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也挾飲而不挾其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津津名赤尾木我前由頼之宗子世不所居之地也

ポルトガル船とともに来日した王直

天文十二年(一五四三年)、(種子島

の)西村の小浦に大きな船がいた。どこの国から来たのかわからない。乗員は百余名で、その姿形は異様であり、言葉も通じず、見た者はみな奇妙に感じた。

文之玄昌「鉄砲記」*(一六〇六年)

*「鉄砲記」：種子島久時が薩摩国大竜寺の禅僧・南浦文之(玄昌)に編纂させた鉄砲伝来に関する記録。『南浦文集』上巻所収。

隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生々無窮是故名焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船客百餘人其形不類其

神皇正統記

五

語不通見者以爲奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶遇五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也挾飲而不挾其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津

津名赤尾木我前由頼之宗子也所居之地也
ポルトガル船とともに来日した王直

その中に明国の儒生が一人いた。

名は五峯(王直の号)、姓や字は不詳。村長の織部丞は漢文ができたので、砂の上に杖で字を書いて尋ねた。

「彼らはどこの国の人か、なぜ姿形が異なるのか」

すると五峯はこう書いて答えた。

「これは西の南蛮人の商人です」



倭寇を描いた二種の絵巻者

後期倭寇を描いた二種の絵巻物がある。

①中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』
(絹本着色、縦三一センチ、全長五七〇センチ、図中に「日本弘治一年」(一五五五年)と「日本弘治三年」(一五五七年)の文字がある)

②東京大学史料編纂所蔵の『倭寇図巻』(絹本着色、縦三一センチ、全長五七三センチ、図中に「日本弘治四年」(一五五八年)の文字がある)

倭寇の地域別発生件数

■ 朝鮮半島 ■ 中国

田中健夫『倭寇 海の歴史』
(講談社学術文庫 2012年)をもとに作成

遣明船の派遣 1401-1547



鎌倉時代

南北朝時代
1336-92年

室町時代

戦国時代
1493-1573年

安土桃山時代

江戸時代

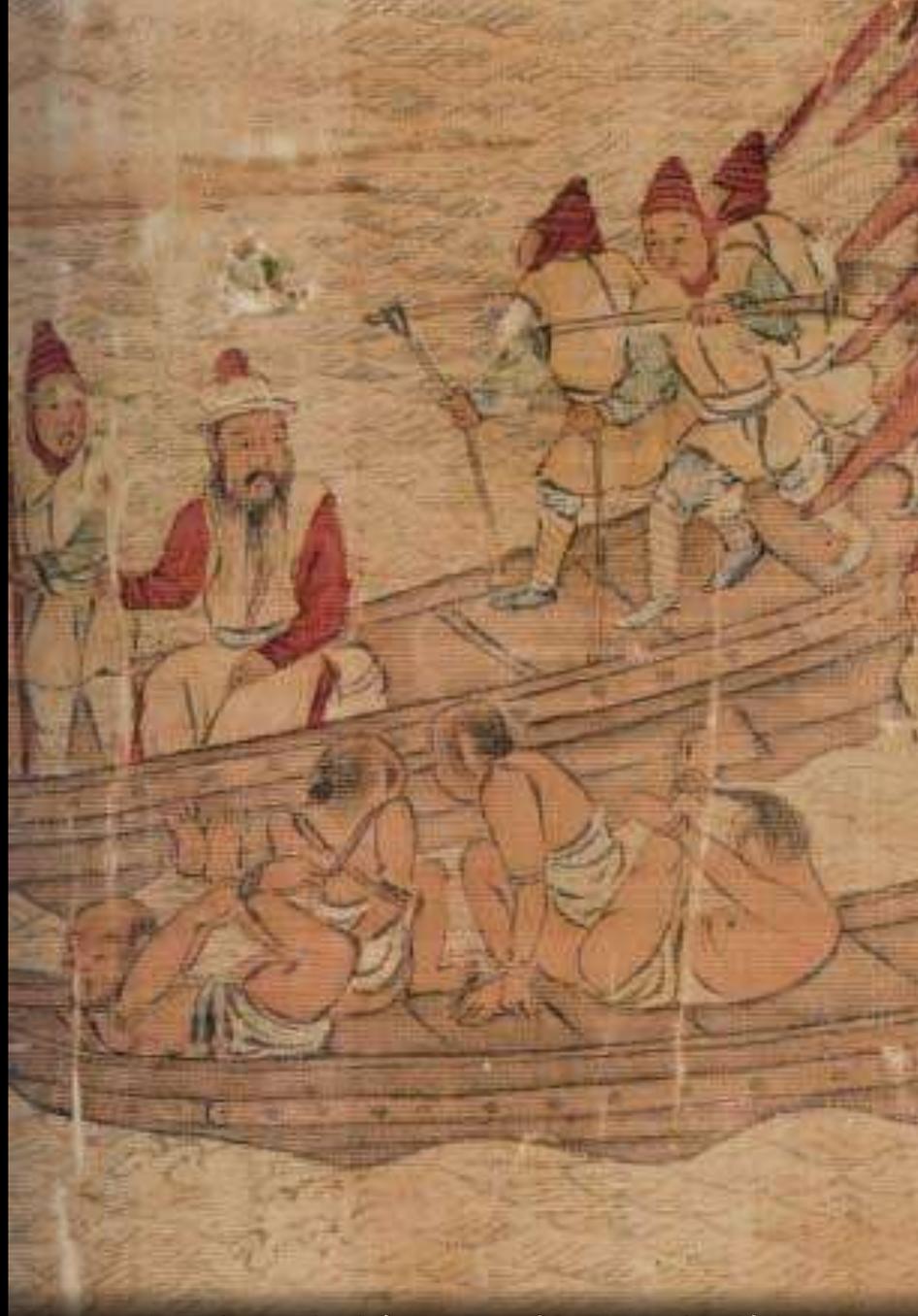


抗倭图卷(中国国家博物馆藏)



倭寇凶卷(東京大学史料編纂所藏)





抗倭图卷(中国国家博物馆藏)

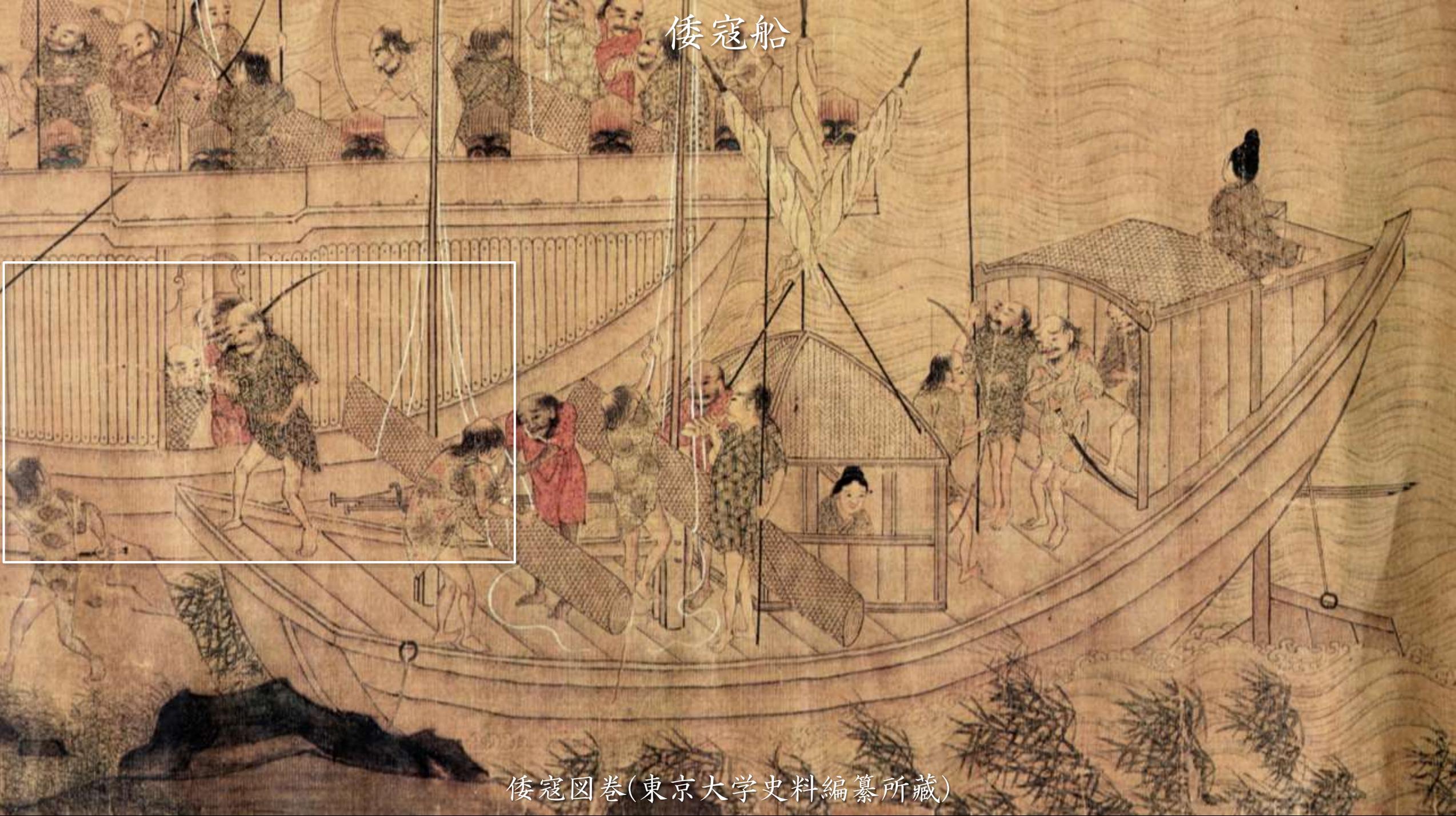


倭寇图卷(东京大学史料编纂所藏)

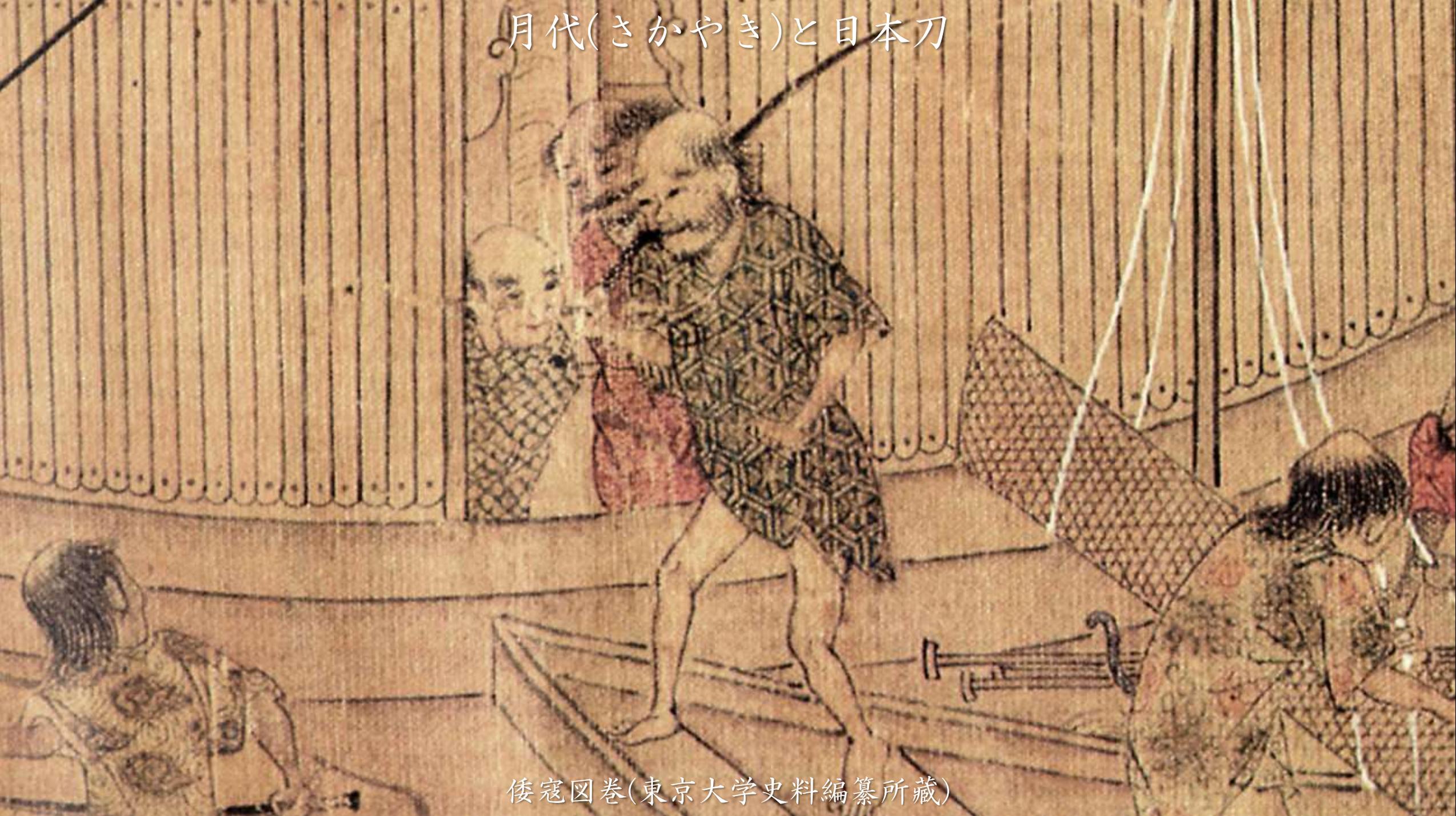
倭寇の襲来



倭寇船



月代(さかやき)と日本刀



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

倭寇の上陸



放火と略奪



逃げ惑う民衆

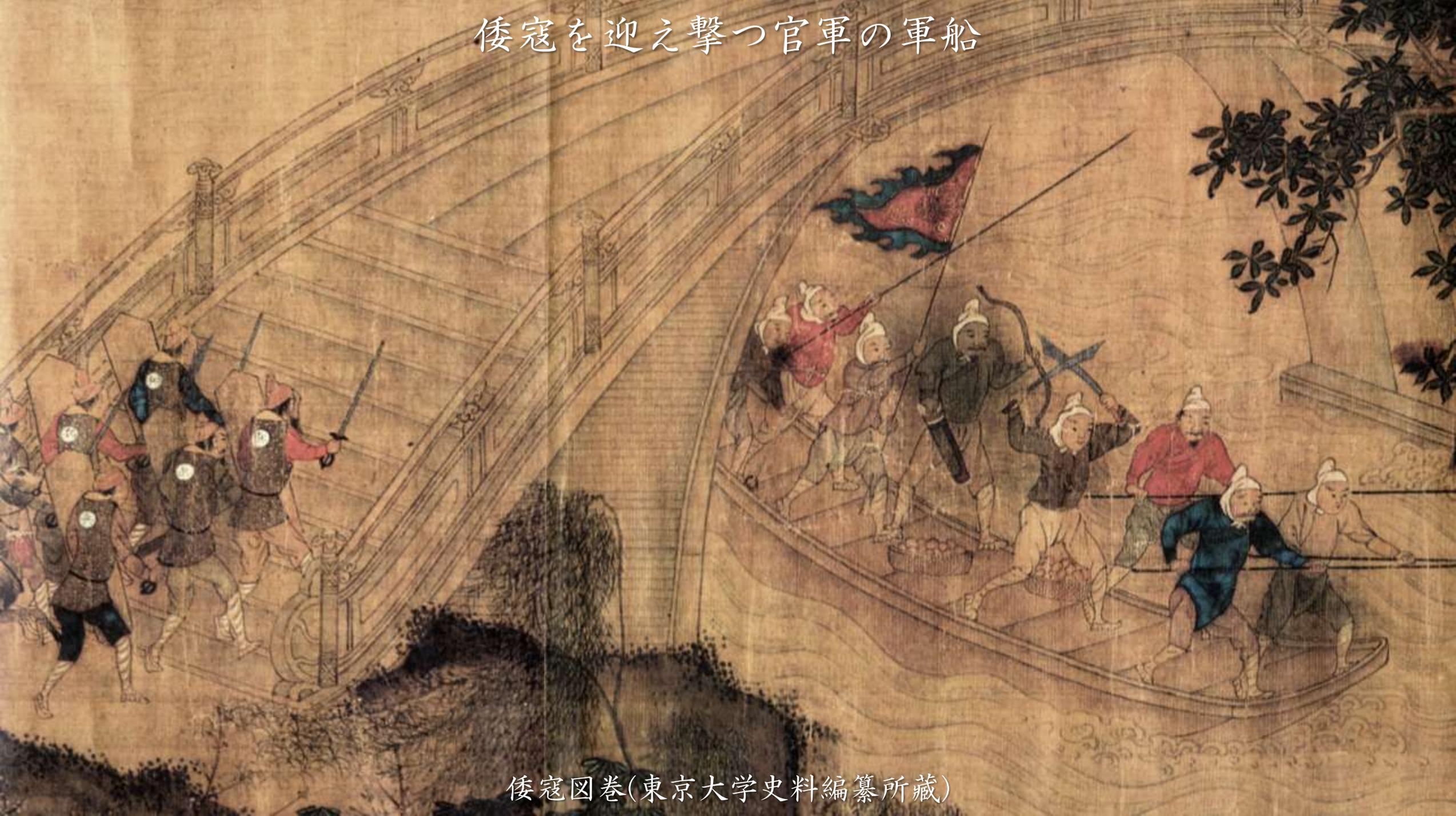


官軍が倭寇退治に出発



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

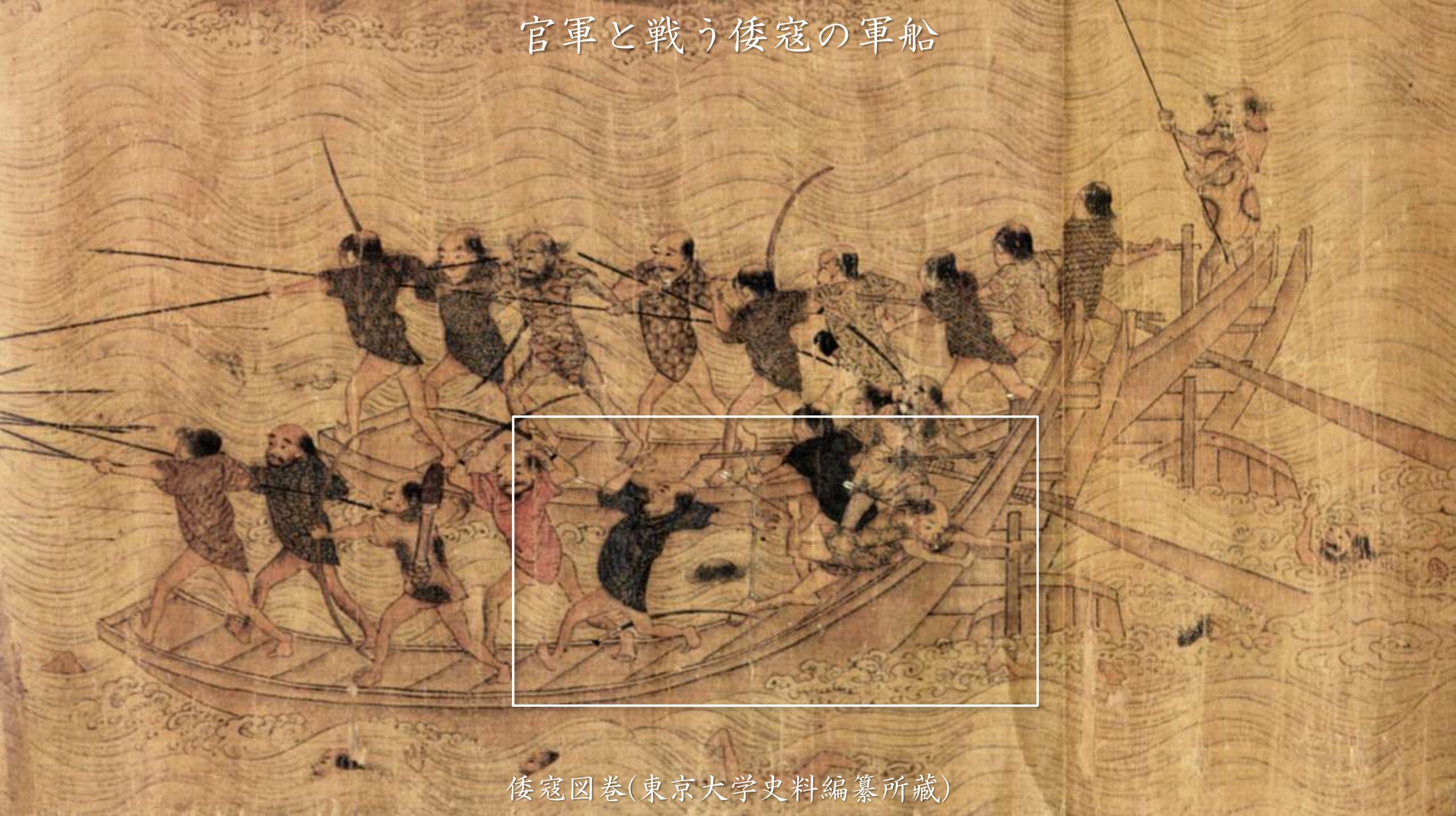
倭寇を迎え撃つ官軍の軍船



倭寇と戦う官軍の軍船



官軍と戦う倭寇の軍船



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

矢に当たり海に落ちる倭寇たち



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

“報捷”（勝利の知らせ）を伝える伝令



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

“報捷”（勝利の知らせ）を伝える伝令



倭寇図巻(東京大学史料編纂所蔵)

倭寇の拉致事件を描いた明代の小説

「楊八老越国奇逢」

(古今小説卷十五所収)

陝西の商人・楊八老には李氏という妻と世道という子がいた。商いのため福建に行った楊八老は、そこで檠(はく)氏を妻に迎え、世徳という子が生まれる。

陝西に帰る途中、楊八老は倭寇によって異国に連れ去られてしまう。それから十九年後、倭寇とともに中国に戻った楊八老は、役人に捕えられ、裁判にかけられる。

昔の下僕の証言で、楊八老は紹興府へ送られるが、そこで役人となっていたのは、十九年前に別れた二人の子供たちであった。

こうして物語は大団円で終わる。

今朝採錦喜双牵



第十八卷

楊八老越國奇逢

君不見平陽公主馬前奴，一朝富貴嫁爲夫。又不見咸陽東門種瓜者，昔日封侯何在也。榮枯貴賤如轉丸，風雲變幻誠多端。達人知命揔度外，傀儡場中一例看。

這篇古風是說人窮通有命，或先富後貧，先賤後貴，如雲蹤無定，瞬息改觀，不由人意思測度，且如宋朝呂蒙正秀才未遇之時，家道艱難，三日不曾飽餐，天津橋上賒得一瓜，在橋柱上磕之，手落于橋下，那

楊八老越國奇逢 (古今小說第十八卷 法政大學圖書館藏)

楊八老漳州
被虜



楊八老越國奇逢(古今小說第十八卷所收 法政大學圖書館藏)

日本の能に描かれた明の被虜人

謡曲「唐船」

祖慶官人は寧波近くで倭寇に捕えられ、筑前の箱崎殿のもとで十三年間使役される。そこで日本の妻を娶り二人の子供がいたが、ある日、中国に残してきた二人の子供が父を迎えに来る。祖慶官人は両者に挟まれ苦悩するが、箱崎殿のはからいで日本の子供をつれて明に帰国する。



まとめ

南北朝の争乱に始まった室町時代。朝廷や幕府が海上の武装集団による密貿易や略奪行為を黙認したこと、東アジアの人々の対日イメージは大きく悪化する（前期倭寇）。

一三六八年、モンゴルを駆逐し、漢民族の王朝を復興した明は、倭寇を防ぐため、民間貿易を禁じ、朝貢貿易への一本化を進めた。南北朝の争乱に終止符を打った室町幕府は、一四〇四年、朝貢使節を派遣し、明との交流と交易を始める（遣明使）。

しかし、室町幕府の力が衰え、戦国時代を迎えると、多国籍の武装集団が日本を拠点に大規模な密貿易と略奪行為を再開し、残虐非道という対日イメージがさらに広がっていった（後期倭寇）。

参考文献

- 田中健夫『倭寇海の歴史』（講談社学術文庫二〇一二年）
- 蓮実重康『雪舟等揚論とその人間像と作品』（筑摩書房一九六一年）
- 朱敏『『明人抗倭図巻』を解読する』『倭寇図巻』との関連をかねて』（東京大学史料編纂所研究紀要第二二号二〇一二年三月）
- 東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇 「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』（吉川弘文館二〇一四年）